

2022年度 一般入学試験 前期日程 (2月1日)

国

語

(試験時間 60分)

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は、27ページあります。
- 3 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 4 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、それぞれ正しく記入し、マークしなさい。

① 試験コード欄・座席番号欄

試験コード・座席番号(数字)を記入し、さらにその下のマーク欄にマークしなさい。正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。

② 氏名欄

氏名・フリガナを記入しなさい。

- 5 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、

10

と表示のある問いに対して③と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の③にマークしなさい。

(例)

解答 番号	解 答 欄									
10	①	②	●	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

- 6 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

第1問 次の文章は一九六三年に発表された評論文である。これを読んで、後の問い(問1～10)に答えなさい。

産業のおおまかな分類には、C・G・クラークによる三分類がしばしばもちいられる。すなわち、第一次産業(農林水産業)、第二次産業(鉱工業)、第三次産業(商業、^(イ)ウニ工業、^(ロ)サービス業)という分類である。これによると、われわれのいうところの情報産業などは、そのセンク^(ロ)的諸形態をもすべてひつくるめて、サービス業に属し、商業などとともに第三次産業に属することになる。わたしはしかし、これはすこしおかしくはないかとおもうのである。

【a】、新聞もラジオもテレビもさまざまな特殊性はあるにしても、今日の世界においては、いずれもひとつの企業であり、商売である。商業新聞、商業放送などということばがしめすように、それは「商業」の一類型であると【b】かんがえられている。すくなくとも、商業としての一側面はもっているものと見なされているのである。

しかし、これをもし商業としてみた場合、この商業のあつかう「商品」のなんと奇妙なことか。いつたい、この種の「商業」の売る商品とはなんであるか。

ふつう、商品といえばやはり物質である。物質ではないまでも、たとえば電力のように、物質に準じたとりあつかいのできる、いわゆる外延量をもったものである。それは、つねに計量が可能であり、たしたりひいたりできるところのものである。【c】、新聞やラジオ、テレビの売るものは、そういうものとはまったくちがうのである。新聞社の売るものはもとより新聞であるが、新聞とは、物質としての新聞紙ではない。新聞紙そのものは、まにあわせる悪質の包装材料であるにすぎないし、その売買はハイピン回収業者の仕事である。新聞社が売っているものは、新聞紙という物質的材料のうえに印刷されたニュースであり、あるいは、さまざまな伝達内容をもつところの、一般的に「情報」ということばで表現できる記号の系列なのである。一定の紙面を情報でみたして、一定の時間内に提供すれば、その紙が「売れる」ということを発見したときに、情報産業の一種としての新聞業が成立したのであった。

放送業についての事情も、ほぼそれにひとしい。聴視料をとって電波をおくるという取引はもとより、スポンサーから料金を

とる民間放送の場合でも、原理的にはおなじである。民間放送において、しばしば「時間を売る」という表現がとられるけれど、売っているのはもとより物理的外延量であるところの時間ではなくて、その時間をみたく「情報」なのである。一定の時間を情報でみたくして提供すれば、その「時間」が売れるということを発見したときに、情報産業の一種としての放送業が成立したのであった。

いずれにせよ、売っているものは「情報」なのであって、空間や時間ではない。^(B)空間や時間は、情報のいれものにすぎない。他の商品のように、それ自体が価値をもつものではないのである。これは、商品としてきわめて特殊な性質のものといわなければならぬ。新聞人や放送人の活動の効果を、計量し確認することがむづかしいというのは、かれらのとりあつかう商品の、このような特殊性によるものであるとわたしはかんがえる。

それでは、情報というものは、まったく計量できないものであるか。それはそうではない。情報量というものは適当な定義をあたえれば、量的に処理することができないわけではない。じつさい、サイバネティクス^(注)あるいはいわゆる情報理論 (Information theory) においては、それをこなっている。その場合、情報とは、いくつかある可能性のなかのひとつを指定することである。すると、最小の情報とは、ふたつの可能性のうちのひとつを指定することである。これがビットとよばれる情報の単位となる。

理論的には、こうしてすべての情報はこのビットによつてはかることができるわけであるが、それはどこまでも数学的ないしは工学的な理論の問題であつて、現実には、「今夜のテレビ・ドラマの情報量は何ビットであつた」などということ、まるで意味をなさないのである。だいたい、情報量決定の基礎になる「可能性の数」が決定できない。しかも「商品」として売ったり買われたりするものは、そういうビット数の決定できないようなドラマのたぐいなのである。

仕かたがないから、情報量を時間量におきかえてみたり、あるいはスペースのおおきさにおきかえてみたりするわけだが、そんなものはほんとうは情報そのものの量とは関係がない。そういう意味では、情報産業のとりあつかつている情報というものは、正確な計量なしにあつかわれていたのであつて、もしでたらめをやるうとおもえば、どのようにならでもでたらめなことになり

うる性質のものである。それが、でたらめであるかどうかさえ、決定するシヤクドはない。常識的にいって、現在の情報産業が、それほどでたらめな状態におちいつているとおもえないのは、やはり情報産業従事者たちの、計量をはなれた文化的価値への信念、あるいは責任感というようなものがささえになっているからだ、とみることができないうか。あるいは、それらの人びとの信念や責任感にもかかわらず、すでに情報産業は、価値的にめちやくちな状態におちこんでいるのかもしれない。しかし、それを測定する方法さえないのである。

じじつ、情報をとりあつかう業種においては、取引上、はなはだインチキくさいこともおこりうるのである。こまったことには、情報というものは、さきのサイバネティクス系の定義を採用してみても、いくつかの可能性のうちのひとつを「指定することである。べつに「品物」をわたすわけではないのだから、いっぺんおしえてしまえばおしまいだ。情報の内容をいつてしまつてから、「この情報を買わないか」ともちかけても商売にならない。だから、情報産業においては、さきに金をとるのが原則である。出版はもちろんれつきとした情報産業だが、その提供する商品たる本や雑誌が、書店の店頭で「立ちよみおことわり」ということになるのはそのせいである。また、映画や芝居は、入口で入場料をとる。あれは、実質的には観覧料であるが、みてからでは金がとりにくいので、入場することについて料金をとる。このへんからも、映画や芝居がやはり情報産業の一種であることがあきらかである。

もつとも、見世物などで、「お代は見てのおかえり」というのがある。これはまさに、情報産業がおちいる可能性をもつているインチキ性をしめすもので、そういうインチキの可能性がたかいからこそ、インチキでないことを説得するために、「見てのおかえり」を提案しているのである。

一般に、情報産業の提供する商品を、買い手は、その内容をしりもしないで、さきに金をだして買うのである。そして、小さい小冊子に大感動をしたり、大金を投じた本に失望したりするのである。こういう商品は、ほかにあまりない。それでも、これで詐欺罪になつたりしないのは、やはり情報産業というものが基本的に一種の社会的責任感で裏うちされているからではないだろうか。

じつは、こういう奇怪なもの、をほかの品物といつしよに「商品」とかんがえることにむりがあつた。そもそも「商品」という觀念がでてくるのは、マニユファクチュアないしは工業的生産の結果であつて、工業—商品がひとつの系列をなす。情報産業というものは、工業などとはべつての系列からでてくるものであつて、商品と同列にはあつかいがたい。ただ、工業的生産が圧倒的な力をもつ時代においては、ほかのものも工業的生産物たる商品のカテゴリーにあわせて理解しようとしているのにすぎないので、それはいわば擬似商品である。

工業的生産の体系のなかでは、なんらかのものから、なんらかのものをつくる。それが原則である。そこからは実質的な物質がつくられる。そして商業もまた、そのつくられた実質的な物質を売買する。「実業」というよび名の裏には、そのような実質あるもの、のずしりとしたおもしろさを感じられる。

それに対して、情報産業のなんとかるやかで、なんとむなしなことか。情報産業のあつかうものは、実質のあるものではない。新聞や出版は、まだしも紙のおもさが手にこたえるけれど、放送産業となると、まったくなにもない。営々と努力してつくつたものは、むなしく虚空にきえてゆくのである。ここに、「実業」という概念に対立するものとして、「虚業」という觀念が、情報産業従事者のなかから、なかばみずからを戯画化した表現としてでてくるのである。

しかしながら、この虚業意識が、なんらかの意味で実業に対する劣等感を内包しているとすれば、それはつまらないことである。まさに、実質的なもの、あるいは商品はあつかわれないというところに、情報産業の特徴があつたのだ。その特徴あるがゆえに、情報産業は、すべての工業的物質生産および商品的商業を **X**、独自の存在であることを主張しえたのである。

これはいわば、虚業意識の **Y** 理論である。虚業であつてなにかがわるい、というかんがえかたである。虚業であるがゆえに、それは実業にはない新鮮で独自の性格をもちえたのである。

このことは、数学における虚数の発見に似ている。数というものは、はじめは単純な自然数から出発した。それに小数がくわり、有理数と無理数の区別がわかり、やがて虚数が発見される。虚数とは、むなしき数でもなければ、存在しない数でもない。それは、実数とまったくことなる、独自の性格をもって実在する数の発見であつた。そして、虚数の発見によつて、それが実数

と組みあわさされて、複素数という、もつとも一般化された数概念の世界にトウタツする(本)ことになったのである。

(梅棹忠夫うめさおただおの文章による。ただし、一部変更した。)

(注) 1 C・G・クラーク ∷ イギリスの経済学者(一九〇五―八九)。

2 サイバネティックス ∷ 人工頭脳学。通信工学・制御工学・統計力学から神経および脳の生理作用までを統一的に扱う理論体系および学問分野。

問 1 空欄〔 a 〕 〔 c 〕に入れるのに最も適切な語句を、次の①～⑤の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

解答番号は

1

3

a

1

① なぜなら

② というのも

③ あるいは

④ たしかに

⑤ つまり

b

2

① だけ

② さえ

③ のみ

④こそ

⑤ しか

c

3

① ところが

② そのため

③ すなわち

④ そして

⑤ したがって

問2 破線部ア「準じた」・イ「たぐい」・ウ「裏うちされている」の本文中の意味として最も適切なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。解答番号は 4 ～ 6。

ア 「準じた」

- 4
- ① あるものにならった
 ② あるものを物差しとした
 ③ あるものよりは劣った
 ④ あるもの続いた
 ⑤ あるものに依存した

イ 「たぐい」

- 5
- ① 相反するもの
 ② 異質なもの
 ③ 対置されるもの
 ④ 対等なもの
 ⑤ 同種のもの

ウ 「裏うちされている」

- 6
- ① 真実が隠されている
 ② 見えない意図に動かされている
 ③ 別の面から支えられている
 ④ 他のものと一体化している
 ⑤ 誤って混同されている

問3 波線部(A)「いったい、この種の『商業』の売る商品とはなんであるか」とあるが、この問いに対する答えとして適切では

ないものを、次の①～⑤の中から二つ選び、記号で答えなさい。解答番号は

7

・

8

。

- ① 計量可能なもの
- ② ニュース
- ③ 紙面
- ④ 情報
- ⑤ 記号の系列

問4 波線部B「空間や時間は、情報のいれものにすぎない」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

9。

- ① 他の商品と同じく空間や時間はそれ自体が価値をもつものではないため、情報を入れて売っているということ。
- ② 一定の空間や時間を売っているようでありながら、実際に価値をもつのはそれらをみたく情報だということ。
- ③ 計量し確認することがむづかしい新聞人や放送人の活動の効果は、空間や時間によってはかるしかないということ。
- ④ ビットとよばれる情報の単位を、スペースのおおきさや時間の量におきかえてみているということ。
- ⑤ ビット数を決定することができない情報に関しては、空間や時間を売るという表現がとられているということ。

問5 波線部(C)「それを測定する方法さえない」とあるが、「それ」が指す内容の説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 10。

- ① 人々に向けて供給される情報そのものの量
- ② ある情報を情報産業があつかうかどうかの評価
- ③ 情報産業従事者たちの信念や責任感の強さ
- ④ 情報産業がもっている値打ち
- ⑤ 情報産業がおちいってしまっているでたらめな状態の程度

問6

波線部D「情報産業においては、さきに金をとるのが原則である」とあるが、なぜそのような原則になっているのか。その理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

11。

- ① 情報はいつペンおしえてしまえばおしまい、二回目以降は値段が下がっていくから。
- ② 物質的な商品と違って、内容を明かしてしまった時点で購入する価値が消滅してしまうから。
- ③ 「お代は見てのおかえり」ではインチキの可能性がたかく、買い手に疑われてしまうから。
- ④ 内容をしらずに金をだすほうが、感動や失望といった買い手の感情の振幅が大きくなるから。
- ⑤ 情報量は投じた金額とつりあわない場合があるが、それで詐欺罪になると困るから。

問 7

空欄

X

Y

に入れるのに最も適切な語句を、次の①～⑤の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

解答番号は

12

13

X

12

① あしげにして

② そでにして

③ もっぱらにして

④ まとめあげて

⑤ むこうにまわして

Y

13

① 生えぬき

② 棚おろし

③ 居なおり

④ ジレンマ

⑤ 逆恨み

問8 本文において、筆者は情報産業をどのようにとらえているか。その説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 14。

- ① 情報産業のあつかうものを従来の商品のカテゴリにあわせて理解することにはむりがあるが、工業的生産が圧倒的な力をもつ時代にあつては望ましい方法である。
- ② 情報産業の提供する商品は、工業―商品の系列と同列にはあつかいがたく、情報産業の統一的な価値の測定方法を決める必要があると訴えている。
- ③ 情報産業のなかでも新聞や出版にはまだしも実質的なもののおもしろさが感じられるが、放送産業にはなにもないため、努力がむなしくなるだろうと懸念している。
- ④ 情報産業の特徴は実質的なものを商品としてあつかわない点にあり、ものの生産や売り買いのなかで特殊で独自の存在であると評価している。
- ⑤ 実業と虚業の関係は、数学における実数と虚数と同様に、はじめは前者だけで出発し、やがて後者が発見されているため、情報産業のほうが新鮮だと主張している。

問9

本文の内容の説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

15

- ① 情報産業は商業としての側面をもつが、そこであつかわれている情報は、物質や、外延量をもったものではない。「品物」としてわたすわけではないものを工業的生産物と同じ「商品」とかんがえることにはむりがある。
- ② 新聞業は、それ自体はまにあわせの悪質の包装材料にすぎない紙を売るための方法が発見されたとき、はじめて成立した。放送業が成立した事情も同様であり、情報産業が成立したのはそこに商機を発見した者がいたためだといえる。
- ③ ビットという単位によってはかるなら、最小の情報とはふたつの可能性のうちのひとつを指定することである。しかし情報産業の商品の場合、基礎になる「可能性の数」が多すぎて数え切れないため、ビットは机上の空論にしかならない。
- ④ 情報産業は虚業であり、本質的にインチキくさをまぬかれ得ない。それが現在、めちゃくちゃな状態におちいついていないのは、情報従事者たちが高い社会的責任感をもって仕事に当たっているためである。
- ⑤ 工業的生産の体系のなかでは、なんらかのものから、なんらかのものをつくるといふ原則がある。情報産業は、実質あるものをあつかわないという点ではこれと異なるが、営々と努力して商品をつくり出すという点では同じである。

問10 二重傍線部(イ)～(ホ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。解答

番号は 16 ～ 20。

(イ) ウンユ

16

- ① ユダンを戒める
- ② 病気がチユする
- ③ ユカいな仲間と過ごす
- ④ 物見ユサンに明け暮れる
- ⑤ ユケツを受ける

(ロ) センク

17

- ① シンクに彩られたドレス
- ② クドクを積む
- ③ 人脈をクシする
- ④ クオンの時が過ぎる
- ⑤ クラクをとともにする

(ハ) ハイヒン

18

- ① 反対派をハイセキする
- ② タイハイ的な雰囲気絵画
- ③ ハイゼン係を務める
- ④ 政治フハイの問題
- ⑤ 優秀な人材をハイシユツする

(ニ) シャクド

19

① 事故についてシャクメイする

② シャクチを買い取る

③ シャクイを授かる

④ 地図のシユクシャクが小さい

⑤ 情状シャクリヨウの余地がある

(ホ) トウタツ

20

① トウテイ予想できない事態

② 恩師のクントウを受ける

③ 現場からトウソウする

④ トウテツした理論

⑤ 講演会でトウダンする

第2問 次の文章を読んで、後の問い(問1～7)に答えなさい。

「なぜ遅刻してはいけないのか」。(イ) きつかけはある生徒の質問だった。「バイト先に遅れたら他の人が困るのは分かる。学校は決まりだからと言っただけじゃないか」と。

県立須磨友が丘高校で哲学の授業が始まり、今年で20年目になる。英語科枠での対話から出発し、「臨床哲学」と銘打った全国でも珍しい講座となって今に続く。

担任の藤本啓子さんは、自らを決して「先生」とは呼ばせない。(A) 生徒も自分も共に対話をする仲間。正解は持たず、彼らの「なぜ」にじっくり向き合う。

各地の地道な取り組みを集め、「哲学対話と教育」(大阪大学出版会)という本ができた。(ニ) 神戸大学付属中等教育学校の中川雅道教諭は生徒らの話す姿を「耳に向かつて祈るよう」と言い表し、福島県で対話続ける辻明典さんは「原発事故がみんなを哲学者にした」と伝える。

哲学教育の伝統を持つ西欧に比べ、日本の学校現場で X 的思考力を養う機会は少ない。新学習指導要領に「深い学び」がうたわれる中、藤本さんは「教育課程に考える場を組み込むことが必要」と訴える。

なぜ、会社に遅刻してはいけないのか。テレワークや時差通勤の普及で「当たり前」は通用しなくなった。学校に限らず、正解なき対話が今ほど求められる時代はない。(ホ)

『神戸新聞』 二〇二二年四月五日 「正平調」による

問1 破線部ア「学校」とあるが、「学校」を主な舞台とする日本近代の文学作品の作者と作品名の組合せとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

21。

- ① 志賀直哉 | 『二房の葡萄』
- ② 中島敦 | 『山月記』
- ③ 太宰治 | 『富嶽百景』
- ④ 夏目漱石 | 『門』
- ⑤ 壺井栄 | 『二十四の瞳』

問2 破線部イ「臨床」と近い意味の語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号

は 22。

- ① 理論
- ② 研究
- ③ 空想
- ④ 実地
- ⑤ 計量

問3 波線部(A)「自らを決して『先生』とは呼ばせない」とあるが、これはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の

①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

23。

- ① たとえ理由は分からなくても、生徒には一度決めたルールを守ることが大事だと伝えたいから。
- ② 「藤本さん」がもともと担当しているのは英語の授業であり、哲学の専門教師ではないから。
- ③ 一方的に答えを与える存在ではなく、「藤本さん」は生徒と同じ立場で話し合うから。
- ④ 正解をすぐに教えることなく、生徒が解答するまで時間をかけて向き合う必要があるから。
- ⑤ 「先生」という呼称を用いると授業や講座になつてしまい、上下関係が生じてしまうから。

問 4 波線部(B)「耳に向かつて祈るよう」とあるが、ここで用いられている比喩の技法として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は 24。

- ① 直喩法
- ② 隠喩法
- ③ 換喩法
- ④ 提喩法
- ⑤ 擬人法

問5

空欄

X

に入れるのに最も適切な語句を、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

25

。

- ① 傍観者
- ② 批判
- ③ 内向
- ④ 共感
- ⑤ 問題解決

問 6

本文の主旨として最も適切なものを、次の①～⑤の中から選び、記号で答えなさい。解答番号は

26

- ① 哲学のような、容易に正解を見つけることができない分野についても、教師と生徒の対話によって解決策と一緒に考えていくことが重要である。
- ② 自分の立場からすれば正当性のある発言でも、他者に受け入れられなければ意味はないのだから、相手を説得する技術を養うことが大事である。
- ③ 長く哲学教育を行ってきた西欧を見習って、日本の学校教育にも哲学を導入し、生徒が教師との対話を通じて自分で考える場を提供すべきである。
- ④ 新型コロナウイルスの流行により、テレワークや時差通勤が普及した現在、「遅刻してはいけない」という前提は自明のものではなくなりつつある。
- ⑤ 多くの分野で「当たり前」が通用しなくなりつつある今こそ、各人の価値観が異なることを前提とした、考えを深めるための対話が必要となっている。

問7 二重傍線部(イ)～(ホ)の品詞名を、後の①～⑧の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。解答番号は

27

 。

(イ) きつかけはある生徒の

27

(ロ) 言うだけじゃないか

28

(ハ) 「なぜ」にじつくり向き合う

29

(ニ) 本ができた

30

(ホ) 今ほど求められる時代はない

31

- ① 名詞
- ② 動詞
- ③ 形容詞
- ④ 連体詞
- ⑤ 副詞
- ⑥ 接続詞
- ⑦ 助詞
- ⑧ 助動詞